

各位

金蘭千里中学校

本校入学者選抜試験問題に関するお願い

昨今、教育現場における著作権の在り方が議論されています。本校も、著作権法に基づいた著作物の適切な運用と管理に取り組んでいます。

本校の入試問題の利用につきましても、下記の点にご留意いただき、適切にご利用をお願いいたします。

記

1. 本入試問題の著作権は、本校に帰属します。複製の作成は、事前に申告いただいた場合のみ許諾します。
2. 本入試問題で引用している文学作品等の第三者の著作物は、関係団体を通じて、引用の許諾申請を行っています。

以上

令和4年度中学入試

[後期 入試]

国語科 問題

注意事項

1. 開始後すぐ、日本語リスニング問題の音声流れ始めます。
2. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
3. この問題冊子は、表紙を含めて20ページあります。

試験中に、印刷がはっきりしなかったり、ページの乱れや抜け落ちに気づいたりした場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。

4. 解答用紙は別に配布されます。解答はすべてその解答用紙に記入しなさい。
5. 問題冊子の余白等は下書きなどに利用してよろしいが、どのページも切り離してはいけません。

[後期 入試] 受験番号 _____

金蘭千里中学校

① 日本語リスニング ※試験開始後、すぐに音声がかかります。

〈問題〉 音声をきいて、次の問いに答えなさい。【余白にメモをとってかまいません】

(1) 【音声は1回しか流れません。】

問一 「どんぶりこ」という歌詞は女の人によるとどのような働きの言葉ですか。次の1～4の中から正しいものを一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 名詞 2 動詞 3 擬音語 4 擬態語

問二 二人の会話の内容と照らし合わせて間違っている記述はどれですか。次の1～4の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「雪」は文部科学省唱歌であるが、「どんぶりこころ」は文部科学省唱歌でないかもしれない。
- 2 女の方は、男の方が歌の歌詞や語源について言っていることには、正しいこともあると考えている。
- 3 男の方は「どんぶりこころ」の歌詞も「雪」の歌詞も間違っていて覚えていた。
- 4 「雪」の「こんこ」という歌詞は雪がこんこんと降る様子を描いたものである。

(2) 【音声は1回しか流れません。】

問一

問二

A _____ 円

B _____ 円

② 次の文章は、スタジオジブリの作品『となりのトトロ』について書かれたものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。
問題に字数制限のあるものは、すべて句読点や記号も一字とする。

『となりのトトロ』の舞台は、昭和三十年代初めの東京郊外です。その頃は一家に一台の電話などありません。近所に電話のある家があったら、そこに電話をかけてもらって呼び出してもらったり、必要なときには電話がある家に行ってかけさせてもらったりしていたような時代です。その当時の人から見ると、ひとりひとりにつながる携帯電話があるのが普通になっている現在の生活なんて、想像もできないでしょうね。

さて、『トトロ』のオープニングは都内から郊外への引っ越しから始まります。(中略) その引っ越しは入院しているお母さんが退院してきたときに空気の良い場所に住めるように、という意味もあったようです。入院中のお母さんはとっても優しく、さつきとまだ四歳のメイにも、「A」しながら声をかけて髪の毛をなでてくれます。

実際のさつきとメイのお母さんはこのようにふたりのことをとってもかわいがっていますが、入院中のため側にいることはできません。このトトロの物語は、引っ越しに加えて、母の不在というテーマから始まるのです。

幼い頃の子どもにとって側において自分の世話をしてくれたり、気持ちをわかってくれたりする母親の存在は、とてつもなく大きいものです。ましてや何もできない赤ん坊は、とにかくずっと側において子どものことを第一に考えて動いてくれる人(実の母親でなかったとしても、その子に対して母性的な働きをしてくれる人)がいないと、生き延びることすらできません。子どもは幼ければ幼いほど、生きるために母性を必要としているのです。ところが、その大切なお母さんが入院して側にいてくれない。①そういう設定で物語が始まります。このことをどう考えたらいいでしょう。

ちよつと話がそれるようですが、へー 1 ～ 王さまが年をとって病気だということから始まる物語があると思いますね。それは、こんなふうにかえることができます。物語のなかで王というのは世界の中心を表しています。その世界の中心のシンボルとでもいうべき王が年をとっているとか病に伏せているという設定は、その世界の生命力や a キュウシンリョク が失われつつある状態を描いているとも言えるでしょう。そのような物語を、こころのなかで起こっていることのメタファー(隠喩)としてもう一段深読みすると、王の病というのは、こころのエネルギー量がとても下がっている状態を表しているとも考えられるのです。そして、その状態が回復していくための

プロセスでどんなことが起こっていくのかを描くものとして、そこからの物語の流れを考えていくこともできるのです。(中略)

そのような深読みでこの『トトロ』を考えると、お母さんの入院というのは、ただ母の不在と考えるよりも、さつきとメイの世界には母性が足りていない状態だと見ることもできるのではないかと思えます。へ2へ赤ん坊が生き抜くために母親(的な役割をする人)をbセツジツに必要としているように、年齢が幼ければ幼いほど、世界に占める母性の割合は大きいものなのです。つまり、十歳のさつきよりも四歳のメイのほうが、やわらかな母性に包まれることがまだまだたくさん必要なのです。

母性に包まれる体験は、②「一体感」でも言ったらいじょうか。赤ちゃんはお母さんのお腹のなかにいるときには、まさにお母さんと一体になっています。生まれて、ひとりの身体で生きなくてはならなくなるというのは、実は大ごとです。なにせ人間の赤ちゃんは、他の動物に比べてずっとcミジユクなままで生まれてきますから、dヨケイにこの一体感を味わいながら育っていくことが必要なのです。自分をだっこしてお乳を飲ませてくれる人との一体感から始まり、家族やきょうだい、そしてeチイキの人たちや学校へと、その一体感の感覚は育ちとともに広がっていきます。たとえば自分が卒業した学校のことを「母」校と言いますよね。特に小学校は母性的な包まれる感覚のなかで育つ場所だと言えるでしょう。自分の母校がいい学校だったと懐かしく思えるというのは、とても幸せなことです。そう思えるあなたは、きつと母校で温かい一体感を感じていたのでしょうか。自分はそこに間違いなく包まれているという安心感のある感覚が、一体感なんです。

さつきとメイは、近所のおばあさんがいろいろ心配してくれていますし、お父さんも家で仕事をする時間もつくっていて、ふたりのことをかわいがり、一生懸命、世話をしています。お母さんがいなくても生活自体には困ったことはありません。へ3へ、お母さんの病状も気になりますし、安心して包まれている感覚を味わうことはできず、どうしても二人の淋しさはぬぐえません。

それでもさつきは学校という、家庭以外にも所属する場所があり、そこで一体感を味わうチャンスもありますが、メイは年齢も小さいし、保育園にも幼稚園にも通っていないため、ヨケイに母の不在がこたえます。さつきが学校に行っている間は、どうしてもひとりぼっちになってしまうので、隣のおばあちゃんに無理を言って、さつきの学校まで連れていってもらったりすることもありました。そしてさつきに抱きついてメイは涙を流します。どんなに元気はつらつに見えていても、母性と切り離されて不安と淋しさは、メイにはとてもこたえています。そのことを誰よりもちゃんと分かち合えるのは、きょうだいであるさつきです。

メイが不安定になったように、母性の欠如を感じたとき、③子どものころはとても危機的な状態になっています。では、どのような

方法で、子どもはこのピンチを乗り越えていくのでしょうか。そんなとき子どものここを助けるのが、子どもだけに見える世界とでもいべきファンタジーの世界なのです。(中略)

少し話がそれますが、たとえば『赤毛のアン』の主人公アンは、両親の愛も知らず、周囲から大切に扱われた体験にも乏しい少女でした。へ4、母性の欠如のなかで育っていたのです。ところが、彼女には並外れた空想力がありました。空想の世界を自分で構築することによって、厳しい現実をなんとか生き延びてきた子だったのです。このアンの空想は、自分自身で自分にとって必要なファンタジーを生成しているものだったと言えるとと思います。

アンのように、母性の欠如を「空想」で乗り切っている子はたくさんいます。ただその場合、はっきり「空想」とわかる(注1)トーンで他人に伝えることができるのなりののですが、ときに、現実との区別がなくなってしまうことがあります。そうすると今度は「うそつき」だと言われてしまうことになり、母性の欠如による淋しさだけでなく、他者ともつながりにくくなる(注2)リスクも背負わねばならなくなることもあるのです。

トトロの存在に最初に気づいたのは、メイです。やはり年齢が低い子のほうがファンタジーの世界にすっと入れるのですよね。そしてメイがトトロに出会ったということ、さつきもお父さんも信じています。このようなファンタジーをきょうだいや親が理解してくれているということ、メイはとても支えられます。

トトロが実在していると信じている子どもがどれくらいいるのかはわかりませんが、サンタクロースが実在していると信じている子はとっても多いですよ。サンタクロースをいくつまで信じていたのかというのが、その人の幼少期の幸福度を示すバロメーターになる、と言われることがあります。それは、子どもが信じている物語を、家族をはじめとする周りの人たちが大切に扱っていたことの証明になるからでしょう。子どもが信じている世界を大切にすること、子どもが成長していくための力になるのです。

さて、母性の欠如を感じ、世界に包まれている感覚が足りないと感じて不安定になっているときに、メイはトトロと出会いました。そして、トトロのお腹にのっかって、ぺたーっと腹ばいになるシーンがあります。幼いときほど、一体感を味わうためには肌と肌がひっついていいることが必要になります。このトトロのお腹にぴったり貼り付いたようになっていいるメイの様子からは、充分に一体感を味わって安心しているのが伝わってきます。

『トトロ』って、【B】とした物語だという印象を持っている人もいられるかもしれませんが、【B】とした幸福感に充ちた物語と

いうより、実のところ、このように母性の不在がもとにあり、なんとも言えない淋しさがベースにある物語なのです。

(岩宮恵子『好きな人にはワケがある 宮崎アニメと思春期のころ』より 一部改めたところがある)

(注1) トーン……全体から感じられる雰囲気。

(注2) リスク……危険が生じる可能性。

(一) 波線部 a↗e のカタカナを漢字に直しなさい。

a キュウシンリョク b セツジツ c ミジユク d ヨケイ e チイキ

(二) へ1↗へ4↘に当てはまる言葉として最も適切なものを、それぞれ次のア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。ただし、同じものを二度選んではいけません。

ア そして イ つまり ウ ところで エ または オ たとえば カ でも

(三) 【A】・【B】に当てはまる言葉として最も適切なものを、それぞれ次のア～カの中から一つ選び、記号で答えなさい。ただし、同じものを二度選んではいけません。

ア ふわふわ イ ほのぼの ウ しみじみ エ わくわく オ はらはら カ にこにこ

(四) 傍線部①「そういう設定で物語が始まります」とあるが、筆者はこの「設定」について、どのような状態を表すものだと考えているのか。本文中から十一字で抜き出しなさい。

(五) 傍線部②「一体感」とあるが、ここでの「一体感」とは、どのような感覚か。本文から三十字以内で抜き出し、はじめの三字を答えなさい。

(六) 傍線部③「子どものころはとても危機的な状態になっています」とあるが、『となりのトトロ』では、実際に誰が、どのような状態になっているのか。本文に書かれている内容として、最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 年齢の幼いメイが、保育園や幼稚園に通うことでしか安心して包まれている感覚を味わえず、不安な状態になっている。

イ 学校に通っているさつきが、母親の病状を気にして学校にメイを連れて行くことになり、困った状態になっている。

ウ 元気はつらつに見えるメイが、母親がいない状況ではさつきに抱きついて涙を流したりしており、淋しい状態になっている。

エ 母性と切り離されているさつきが、学校に行っている間はひとりぼっちになってしまっているので、苦しい状態になっている。

(七) 本文で述べられている『赤毛のアン』の主人公アンと、『となりのトトロ』のメイについて書かれた次の文の空欄に共通して当てはまる言葉を、本文中から九字で抜き出しなさい。

【アンは 九 字 を生成し、メイは 九 字 にすつと入った。】

(八) 本文では、メイの支えとなっている人物として、お父さんとさつきの二人が挙げられている。メイに対して、さつきがしてあげられることは何か。六十字以内で説明しなさい。

(九) 本文に書かれている内容として適切なものを、次のア～カの中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア メイは、大切なお母さんが入院して側にいてくれなかったので、世界に包まれている一体感が足りないと感じていた。

イ さつきは、メイを探するときなど、必要な場合には近所の電話がある家に行って、電話をかけさせてもらっていた。

ウ お父さんは、メイのためだけに家で仕事をする時間をつくっていて、お母さんがいない中、ひとり二人の娘を育てていた。

エ お母さんは、トトロに出会ったというファンタジーを信じるメイに声をかけて、優しく髪をなでてくれた。

オ トトロは、母性のシンボルであり、さつきとメイにとっては肌と肌をひっつけて一体感を味わうことができる存在だった。

カ 筆者は、『となりのトトロ』を幸福感に充ちた作品ではなく、母性の不在がもとにある物語だと考えている。

③ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。問題に字数制限のあるものは、すべて句読点や記号も一字とする。

いつものように、学校が始まる。一時間目はつままない国語、二時間目はつままない音楽、三、四時間目に水泳の授業があつて、午後もつままない算数とつままない社会。空は曇天。Tシャツの上にカーディガンを着た。水泳を見学したいと(注1)多美子に訴えたけれど、却下された。二学期までのaセイセキは報告書に書かれるから、副教科もちゃんと点数を取らないといけなと言われた。水着を着ななきゃならない。(注2)ほのかの水着も見なきゃならない。

——夏休みまでの辛抱じゃない。水泳なんて、あと何回かでしょう。

その何回かが、こんなに心を重たくすることに、多美子は気づいていないのだ。今の自分にとって、この先の「何回か」は、永遠と同じだ。確実に来る、避けられないもの。それに、「夏休み」って言うけれど、実際のところ「休み」なんて一日もないことも、杏美は知っている。夏休みを制する者が受験を制する。先生の言葉を思い出す。

あんなに張り切っていた自分が嘘みたいのに、今は、塾や受験やいろんなことを、あんまり考えたくない気がした。そんなことより、眠い。まだ朝なのに。最近では、毎日いつだって少しづつ眠いのだ。夜の勉強時間をのばしたせいだろう。

赤いランドセルを机におろし、杏美はそれに覆いかぶさって目をつむる。教室はいつも通りがちゃがちゃとうるさくて、うつぶせている杏美を、誰も心配してくれないし、励ましてもくれない。だから杏美はしばらくしてからひっそり顔をあげ、ランドセルの中身をのろのろと引き出しに移してゆく。

このランドセルにして正解だったと、改めて思う。頭をのっけて押しつぶしても、すぐに元のかたちに戻るし、色も艶も、買った時と変わらない。地味で平凡で、おしゃれな飾りがひとつもついていなくて、それでいい。

小学校に入る前、ランドセル売り場に連れて行ってもらった時、杏美がすごく欲しいと思ったランドセルがあった。片隅にラインストーンがデコレーションされた、「スターパール」と名づけられた色の。たしか、ラインストーンは、流れ星をふたつ重ねるデザインだった。

——あなたは①不器量だから、そんなちゃらちゃらしたのは似合わないの。

「不器量」は、多美子の口癖だ。不器量だから、こういうものを着なさい。不器量だから、こういうものを持ちなさい。不器量だから、

しっかりと勉強しなさい。

ふだんから多美子の物言いを聞くともなく耳にしていた香奈枝ママからこつそり、「ママの言うこと間違ってるからね。あずちゃんはいれだからね」と耳打ちされたのはまだ香奈枝と仲良くしていた時分だった。幼い杏美は動物の鋭さで、その言葉を嘘だと思った。

——こんなべらっぺらの、見てくれだけの安物より、こっちのほうがずっとモノがいいんだから。一生モノの革製なのに、こんなに軽くて、職人さんの手作りです、丈夫なの。せっかくおばあちゃんがお金出してくれるって言うんだから、このランドセルにしましょう。

多美子に言われたことを、杏美は受け入れた。実際、多美子を選んだランドセルのほうが値段がずっと高く、高いもののほうが良いのだらうと、子ども心に納得していた。

あの時、大きな声で泣いていたら、何か変わっていただらうか。

ちやらちやらしたいんだ。可愛くなりたいんだ。

そう思う自分を、恥ずかしいと思わない、そういうわたしになっていたのだらうか。

入学式の日には交通安全のための黄色いランドセルカバーが配付され、一年生の間、ランドセルはそれで覆うようにと指示された。翌日には、みんなのランドセルは黄一色になり、ストーンも刺繍もデコも、カバーの下に隠れてしまった。二年生になってカバーを外した頃には、一年間使ってきたランドセルの色や飾りを、改めて気にする子はいなくなっていた。

②多美子の言ったことは、一つを除いて、あとは全て正しかったのだ。

入学式の日には、あんなに眩しく見えた香奈枝の、お決まりのラインストーンがきらきらついたピンク色のランドセルは、早いうちからストーンのほとんどが剝がれ落ちてしまった。かろうじてついているものも買った当初の艶は全くない。燻った粒が不揃いにくっついていて、全然可愛くない。それも含めて、今となってはランドセル自体どうでも良くて、むしろ、軽ければ軽いほうがいい、それだけの教材を運ぶためのいれもの。だから、しなやかで丈夫なこのランドセルが正解。

ばたばたと足音がして机の前に人が立つbヶハイがあった。

「川島さん。助けて」

「ドリル、ドリル」

「計算の宿題あったじゃん。やってきてるよね？」

香奈枝とめぐ美だった。

(注3) あんなことがあった翌週に、よく頼んでこられるなと思って、目の前の少女ふたりの顔をまじまじと見てしまう。めぐ美が「あー」と納得したように息をもらし、

「もしかして、こないだのことまだ怒ってる？ メンゴ！」
すまなそうにへの字の眉を作るけれど、それを見て、堪えきれないとばかりに香奈枝が嘔き出し、

「何、メンゴって」

「親の口癖」

二人で笑う。

「これ」

杏美は③用意しておいたノートを差し出した。香奈枝とめぐ美は礼を言いながら忙しなくノートの数字を写してゆく。

「あのさ」

そのふたりに言う。

「これからは、飯田さんに見せてもらえば？」

息を整えて、できるだけ自然な「クチヨウ」を心がけた。

「は？ ちょっと待ってて！」「今忙しいんだから！」

ふたりはA気もそぞろに言い、いっしょけんめいに杏美の数字を書き続けている。

「はーい、終わったー」「サンキュー」

二人はこれで用事が終わったとばかりに立ち上がる。

「これからは、自分の友達に助けてもらいなよ」

杏美は言った。

「え!?! わたしたち、友達じゃなかったの？」

香奈枝がB素つ頓狂な声を出す。それから二人は、弾かれたように笑った。

「川島さん、やっぱ、毛深い的なやつ、まだ怒ってるのー？」

大きな声でめぐ美が言うから、杏美はとっさに自分の腕を抱えた。暑い日なのに、毎日杏美がカーディガンを着ているのがなぜか、この子たちは想像することもできないんだろうし、想像されるのも、厭だった。

「ごめんごめん」

「めぐが謝ってるんだから、もういいでしょ」

「ね、仲直り〜」

——謝ったら、それでいいの？ わたしの体のことも、宝田さんの水着のことも、あんたたちに何も関係ないじゃん。関係ないのに、わざわざ指摘して……、指摘っていうか、見たままをそのままに言って、そうするだけで、あんたたちの侮りや嘲笑をわたしたちに突きつけることは、気持ちいい？ そうやって、突きつけられたら、わたしだって宝田さんだって、反応しなくちゃならなくなるじゃん。その反応を、笑うなんて、卑怯だ。あんたたちは、卑怯だ。

だけど杏美は最後まで言えない。

香奈枝とめぐ美が去ってゆくのを黙って見送る。

ああ、そうか、と思った。④下に見られているから、対等な喧嘩にもならないんだ。頭に血がのぼるような気がした。もし⑤こちらがもう一步詰め寄ったら、本気でキレられて、そこからいじめが始まるのかもしれないが。

そうになったら、結や智帆たちは、わたしを助けてくれるだろうか。

無理。杏美はため息をつく。そうになったら、あの子たちは、香奈枝の目を恐れて、わたしを避けるようになるだろう。それでいて、こっそり「ごめんね」って謝ってくる。わたしの周りにいるのは、結局のところ、そういう弱い子ばかりだ。

⑥こんなものは、全部通り過ぎる。

藤岡先生が入ってくると、日直の誰かが立ち上がり、「きりーつ」とdゴウレイをかける。「きをつけー」「れい」「ちゃくせーき」あんなのクラス、学級崩壊しかけてるって本当？ と、このあいだ多美子に訊かれた。

本当だよ。終わってる。三組みサイテー。

「では、計算ドリルのノートを後ろから前へ集めてください」
いつものように、列の後ろからノートが回されてゆく。

香奈枝とめぐ美のノートが積み重ねられて回されていくのを見たら、初めて、心臓がふるえた。
とんでもないことをしてしまったという思いと、ざまあみろという思いとが、交差する。

ふたりに写させた答えは全部誤答だ。1より小さい分数三つの掛け算の答えが百を超えるとか、無茶苦茶なことをしてやった。自分の頭で何も考えず、馬鹿みたいに数字を写していく香奈枝とめぐ美をあざ笑おうと思っていたのに、今になって急に怖くなってきて、全部白状しようかという考えが湧き上がった。

ノートを集めた先生が教室を出てゆく。止めようがない。

何にも知らない香奈枝たちは、さっそくグループで集まり、その輪の中でいつものように香奈枝が踊りだす。ポニーテールが揺れている。

こんなちっぽけな、期間限定の王国で、順序をつけた人形を並べているみたい。スマホの中の秘密のトークルームで香奈枝の悪口を言っているという三人が、朗らかな笑顔で香奈枝のダンスに拍手をしている。

果たして藤岡先生は気づくだろうか。気づいたとして、あのふたりをきちんと問い質せるのだろうか。

先生は、忙しすぎて、もしかしたら気づかないかもしれない。気づいても、見て見ぬふりをするかもしれない。そう思ったら少しだけ心が落ち着いた。しかし、凧いだ心は鏡となつて、とんでもないことを「してやった」と思えるほどの度胸もなく、ほのかをきちんと庇うことも、爆発しそうな怒りを言葉にすることもできなかつた自分の弱さを映しだしもしていた。

杏美は自分に言い聞かせる。

こんなものは、全部通り過ぎるんだ。

そのことを、自分だけが知っている事実のように、杏美は思う。

わたしは受験するのだし、ここにいる皆とは、全然違う世界に行くのだ。

多美子の言ったことに、一つだけ間違いがあった。

一生モノのランドセルなんて存在しない。ランドセルなんて、今だけじゃん。

恋焦がれたスターパープルが、六年も経たないうちに、こんなにもどうでもよくなるみたいになら、いつかこの瞬間も、どうでもいいものになる。

ほぼeカクシンのようにそう思っている。

それなのに、馬鹿にしようと思えばするほど、王国は眩しく輝かしく、杏美を閉じ込める。今この瞬間の生こそが全てだと、他の時間など存在しないのだと信じ込ませんとばかりに圧してくるから、酸欠になりそうな魚の必死さで杏美は居場所を探す。

知らないテレビの話で盛り上がっていた結や智帆は、杏美が近づくと自然に天気の話題に変えて、今日は水泳できるかなあ？ と話しかけてくれる。やだなー、見学したい、と杏美が言うと、ねー、と同調してくれる彼女たちの、穏やかな微笑みがつまらない。

⑦「こんなものは、全部通り過ぎる」などと嘯いていられるのは、彼女たちがいてくれるからだということに、杏美はまだ気づいていない。

(朝比奈あすか『君たちは今が世界』より 一部改めたところがある)

(注1) 多美子……杏美の母親。

(注2) ほのかの水着……学校で水泳練習があったとき、ほのかの水着のゼッケンに書かれた学年とクラスが何度もマジックで上書きされたのを見た、クラスメイトの香奈枝とめぐ美が、儉約家でえらいと、更衣室にいるみんなの前ではのかをかからなかったことがあった。また、ほのかの水着の一部が少しすりきれそうに薄くなっていることを杏美は気にしていた。

(注3) あんなこと……学校で水泳練習があったとき、水着姿の杏美を見ためぐ美から「わー、毛深っ！」と突然言われ、凍りついた杏美に対して、めぐ美が軽い調子で謝り、香奈枝が演技調で「悪気はないからね、(めぐ美を)許してあげて」と言ったこと。

(一) 波線部 a く e のカタカナを漢字に直しなさい。

a セイセキ b ケハイ c クチヨウ d ゴウレイ e カクシン

(二) 次の X・Y の問いに答えなさい。

X 杏美は何年生か、小学・中学・高校のいずれかと組み合わせ「高校一年生」のような形で答えなさい。

Y 杏美とほのかの名字は何か、それぞれ漢字で答えなさい。

(三) 傍線部①「不器量」とあるが、ここでいう「器量」の意味として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 派手さ イ 顔立ち ウ 世間体 エ 面白み

(四) 傍線部②「多美子の言ったことは、一つを除いて、あとは全て正しかったのだ」とあるが、多美子の言った一つの間違いとはどういうことか。ランドセルについて五十文字以内で説明しなさい。

(五) 傍線部③「用意しておいたノート」とあるが、それはどんな内容だったのか。そのことを説明した連続する二文を本文中から抜き出し、その一文目の最初の五字を答えなさい。

(六) 二重傍線部 A 「気もそぞろ」 B 「素っ頓狂」の意味として最も適切なものを次のア～エの中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

A 「気もそぞろ」 A 他のことが気にかかって落ち着かない

イ 気が立っていらいらしている

ウ 気持ちを目の前のことに集中させる

エ 必死で言い訳しようとする

B 「素っ頓狂」

ア 予想を超えた出来事が起きてとても驚くさま

イ 素直な気持ちをありのままぶつけようとするさま

ウ 場違いなことや調子外れの言動を突然するさま

エ 冗談半分で相手の気持ちを揺さぶろうとするさま

(七) 傍線部④「下に見られているから、対等な喧嘩にもならないんだ」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 杏美を見下しているから、香奈枝とめぐ美は、杏美と意見をぶつけ合うこともなく、杏美に憎しみの目を向けるのだということ。

イ 杏美を見下しているから、香奈枝とめぐ美は、一方的に適当な謝罪で済ませたり、杏美の反応を笑ったりできるのだということ。

ウ 杏美を見下しているから、香奈枝とめぐ美は、頭に血がのぼってしまった杏美に同情し、いろいろ世話を焼くのだということ。

エ 杏美を見下しているから、香奈枝とめぐ美は、杏美が友達であるふりをして不満げな杏美の誤解を解こうとするのだということ。

(八) 傍線部⑤「こちらがもう一步詰め寄ったら」とは、どうすることを言っているのか。本文中から二十字以内で抜き出しなさい。

(九) 傍線部⑥「こんなものは、全部通り過ぎる」とはどういうことか。杏美の考えを説明したものとして最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 結や智帆たちは精神的に弱いので、杏美を助けたり庇ったりすることができず、陰で杏美に謝りながらも、香奈枝の目を恐れて、杏美を避けるようになるだろうということ。

イ 藤岡先生は、香奈枝とめぐ美の行為に気づいたとしても、二人をきちんと問い質すことができないだろうし、もしかしたら全部見て見ぬふりをするかもしれないということ。

ウ 香奈枝とめぐ美が人の見た目を侮ったり嘲笑したりしていても、それは二人と何の関係もないことなので、彼女たちの指摘には何の説得力もなく、聞き流せばよいということ。

エ 今のクラスの人間関係は卒業するまでの限定的なもので、中学受験をしてみんなと違う学校に進学すれば、今のつらい状況も、どうでもいい過去のものになるのだということ。

(十) 傍線部⑦「こんなものは、全部通り過ぎる」などと嘯うたいていられるのは、彼女たちがいてくれるからだ」とはどういうことか。
その説明として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 杏美が「こんなものは、全部通り過ぎる」と自分に言い聞かせていられるのは、このクラスで過ごす時間こそが、輝かしい唯一の世界だと信じ込ませようとする香奈枝たちの圧迫あつぱくに、結や智帆たちが向き合ってくれており、そのおかげで杏美が直接の被害を受けずに済んでいるからだということ。

イ 杏美が「こんなものは、全部通り過ぎる」と自分に言い聞かせていられるのは、結や智帆たちが、スマホの中の秘密のトークルームで香奈枝の悪口を言い合うことで、表向きは香奈枝らと仲良くしながらも、裏で彼女たちを孤立こりりさせようとクラスメイトに働きかけてくれているからだということ。

ウ 杏美が「こんなものは、全部通り過ぎる」と自分に言い聞かせていられるのは、結や智帆たちが、テレビや天気などの何でもないう普通ふつうの話題で盛り上がることによって、教室に穏やかな空気が作り出され、ストレスで酸欠になりそうな杏美が結果的に楽になることができるからだということ。

エ 杏美が「こんなものは、全部通り過ぎる」と自分に言い聞かせていられるのは、たとえ杏美から見て弱くてつまらなかつたとしても、結や智帆たちが、杏美のことを気にかけて優しく声をかけたり同調してくれたりすることで、杏美がクラスで孤立する心配がなくなっているからだということ。

① (20点)

(1)	問一	4	④
	問二	4	④
(2)	問一	5	④
	問二	A 1700円	④
		B 2450円	×2

② (50点)

(一)	a 求心力	b 切実	c 未熟	d 余計	e 地域	②
(二)	1 オ	2 ア	3 カ	4 イ		②
(三)	A カ	B イ				②
(四)	母性が足りていない状態					③
(五)	自分は					③
(六)	ウ					③
(七)	ファンタジーの世界					③
(八)	母性の欠如による不安やさびしさを分かち合い、トトロに出会ったというメイのファンタジーを信じて理解してあげること。(56字)					⑩
(九)	ア・カ					③
						×2

③ (50点)

(一)	a 成績	b 気配	c 口調	d 号令	e 確信	②
(二)	X 小学六年生					②
(三)	Y 杏美の名字「川島」	ほかの名字「宝田」				③
(四)	ランドセルは一生使い続けるものではなく、小学生時代に使えばその後二度と使うことがないということ。(48字)					⑧
(五)	ふたりに写					③
(六)	A ア	B B	ウ ウ			②
(七)	イ					④
(八)	爆発しそうな怒りを言葉にすること(16字)					④
(九)	エ					④
(十)	エ					④